

先週私たちは、ヘロデ王の迫害によって、ヨハネの兄弟ヤコブが殺されたこと、またペテロも捕らえられ、彼がユダヤ人たちの前に引き出されようとしていた前夜に、御使いによって助け出されたことを見ました。ペテロの救いは、エルサレムの教会に大きな喜びをもたらしたわけですが、その後で、主はヘロデ王を打たれるのです。彼が神様に栄光を帰さなかったからです。そのようにして、主のみことばは、迫害の中を通りながらも、神様に熱心な祈りをささげる弟子たちによって広められて行きました。

さて今日の箇所では、再びアンテオケ教会のことが記されていますが、まず先週の最後の箇所を見たいと思います。使 12:25 「任務を果たしたバルナバとサウロは、マルコと呼ばれるヨハネを連れて、エルサレムから帰って来た」。大ききんで苦しむユダヤの教会を助けるために、アンテオケ教会から救援物資を託されたバルナバとサウロは、エルサレムでのその任務を果たしてアンテオケへと戻ってきます。その際に、マルコ（バルナバのいとこ）と一緒に連れて来るのです。そして、今日の 13 章へと入っています。

この使徒の働きのメッセージを始めてから、いつも見てきたことですが、主イエスを信じる弟子たちの歩みは、実に聖霊に導かれたものでした。彼らは、自分たちの計画や力によってではなく、聖霊に満たされ、また導かれることで主の証人となったのです。ユダヤ人たちの教会に対する迫害は、ステパノの殉教を機にいよいよ激しさを増しますが、使徒たちを除く弟子たちは、みことばを語りながら、諸地方へと逃れていきました。そして、主の御手が彼らとともにあったので、彼らがアンテオケでもみことばを語った時、多くの異邦人たちが主を信じたのです。そのようにして主のご計画と聖霊の力によって誕生したのがアンテオケの教会です。

その後、バルナバとサウロが、まる一年、アンテオケの弟子たちを教えるわけですが、それによって彼らは成長します。そして、人々から初めて「キリスト者」と呼ばれるようになるのです。今日の箇所では、そのアンテオケ教会の指導者たちのことが記されています。1 節 「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた」。

彼らについては、詳細が記されていないので、わからないことだらけですが、たとえば「ニゲルと呼ばれるシメオン」とは、ニゲルがラテン語の「黒い」という意味からアフリカ人だったと考えられています。クレネ人ルキオは、アンテオケで初めて主のことを語った幾人かのうちの一人であったのかも知れません。国主ヘロデの乳兄弟マナエンは、主イエスの公生涯の頃にガリラヤを支配していたヘロデ大王の子、ヘロデ・アンテパスと同じ年頃で、王子とともに宮廷で育てられたようです。ですから、彼は身分の高い家柄の出身であったと思われる。このような人々が、バルナバ、サウロとともにアンテオケ教会の指導者でありました。

2-3 節 「彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、『バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい』と言われた。3 そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した」。彼らは聖霊がこのように言うのを聞いた、というわけですが、それはどのようにしてであったでしょうか？ 「聖霊」が主語に置かれている箇所は、ここが初めてではないですが、でも、アンテオケの指導者たちは、どのようにして聖霊の声を聞いたのか？それが彼ら自身の声（考え）ではないと、彼らはどうやって判断できたのでしょうか？

残念ながら、聖霊がどのようにして彼らに語られたかはわかりません。でも確かなことは、それが彼らをして主を礼拝し、断食している時であったということです。つまり、その時、彼らの心は、主イエスだけに向けられていました。この「彼ら」とは、「預言者や教師」のことですから、当然、聖書に通じていたことでしょう。主が昇天の際に、弟子たちに命じられた大宣教命令のことも知っていたはずで、またサウロが、主の御名を異邦人と王たち、またイスラエルの子孫たちに運ぶために選ばれたことも知っていたと思います。

それらのことを考えるなら、彼らが主を礼拝し、御心を求め、それに聴き従おうとする中で、このようにして聖霊に語られた、というのも理解できるのではないのでしょうか？彼らは、それを確認するかのようにして、さらに断食と祈りを持ち、バルナバとサウロの上に手を置いてから、彼らを宣教へと送り出します。

4節「ふたりは聖霊に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った」。前の地図を見て下さい。セルキヤとは、アンテオケの近くにある港町で、彼らはそこに下り、そこから船でキプロスへと渡ります。キプロスとは、以前も見たようにバルナバの故郷で、ここには多くの離散のユダヤ人たちがいたといわれます。この後、「サラミス」、「パpos」 という町もでてきますので、それらの位置も確認して下さい。

ここでも彼らは「聖霊に遣わされて」、キプロス行きを決定します。そこに行くことが主の御心であるという確信と平安をいただいたのでしょう。そして5-7節「サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めた。彼らはヨハネを助手として連れていた。6 島全体を巡回して、パposまで行ったところ、にせ預言者で、名をバルイエスというユダヤ人の魔術師に出会った。7 この男は地方総督セルギオ・パウロのもとにいた。この総督は賢明な人であって、バルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた」。

サラミスに到着すると、バルナバとサウロは、まずユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ始めます。そして、この時、彼らはヨハネ（マルコ）を助手として連れていた、と著者のルカは補足するのです。このユダヤ人の会堂でまずみことばを語ることは、彼らの用いた宣教方法としてこの後も出てきます。というのも、彼ら自身がユダヤ人ですし、神様の約束としてのメシヤを待つユダヤ人たちに、それがナザレのイエスであると証することは、主の御心であったからです。それに、もし彼らが異邦人たちに先に宣教していたら、どうなっていたでしょう？ユダヤ人たちは決して彼らに耳を貸さなかったと思います。そこには大きな隔てがあったからです。

彼らが、ユダヤ人の諸会堂でみことばを宣べ伝えた結果は、何も記されていません。ですから、サラミスでは誰も主を信じなかった可能性もあります。ただその後、彼らが島全体を巡回し、島の西側にあるパposまで来た時に、救いの出来事が起こるのです。ローマの地方総督セルギオ・パウロがそこで救われるのです。この人については、「賢明な人であって、バルナバとサウロを招いて、神のことばを聞きたいと思っていた」とだけ記されています。ですから、彼は、神のことばにもともと興味をもっていたようです。

ところが、彼のもとには、ユダヤ人の「にせ預言者」で、名をバルイエスという魔術師がいました。この魔術師とは、この時代、東方の異教、ことにペルシャ宗教の奇術をもって人々を驚かせ、彼らの信望を得ていた者たちのことをいい、当時、ローマの高官たちは、特に魔術師たちに興味を持っていた、という証言が残っているそうです。ですから、サマリヤにいた魔術師シモンのように、このバルイエスも魔術をもって人々を驚かせ、総督の心も引き付けていたのでしょう。そこに聖霊に遣わされたバルナバとサウロが現れます。

8-11節「ところが、魔術師エルマ(エルマという名を訳すと魔術師)は、ふたりに反対して、総督を信仰の道から遠ざけようとした。9 しかし、サウロ、別名でパウロは、聖霊に満たされ、彼をにらみつけて、10 言った。『ああ、あらゆる偽りとよこしまに満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵。おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。11 見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる』と言った。するとたちまち、かすみとやみが彼をおおったので、彼は手を引いてくれる人を捜し回った」。

バルナバとサウロからみことばを聞いた総督は、心を開いたのでしょう。それを見たバルイエスは、総督を信仰の道から遠ざけようとするのです。この時、相手がローマの地方総督ということもあってか、サウロの名が、ここからユダヤ名ではなく、ローマ名の「パウロ」へと変わります。その理由はわかりませんが、ここから異邦人宣教が本格的に進んでいったことを考えるなら、パウロがその状況を考えて、ローマ名を使ったことが考えられます。私自身も、本名の韓国名と日本名（通名）をもっていますが、これまで日本では通名を、日本国外では、本名を使ってきました。

話を戻しますが、ここでも「聖霊」ということばが出てきます。その聖霊に満たされたパウロは、バルイエスをにらみつけるのです。すでに見たように彼が、総督を信仰の道から遠ざけようとしたからです。この「にらみつける」とは、「まじまじと見つめる」「一心不乱に見つめる」という意味ですが、そのようにしてバルイエスをにらみつけたパウロは、それで終わりません。彼を「悪魔の子」と呼び、彼が日の光を見ることができなくなると宣告するのです。すると、たちまち、彼の目は見えなくなってしまうました。

この時のバルイエスの心境はどんなものだったのでしょうか？魔術をもって治せたら良かったのですが、どうやらそれもできなかつたようです。パウロは、ここで「見よ。主の御手が今、おまえの上にある」と言っていることを行ったわけですが、私たちはすでに主の御手が、主を信じて、みことばを語る者とともにあることを見ました。でもここでは、主を信じない者、主に敵するバルイエスにもそれが伸ばされたことを見ることができません。そして、それは、彼にとっては目が見えなくなること、つまり、災いを意味していたのです。私たちは、ここから主の御手が、主を恐れ敬う者の上にも、またそうでない者の上にもあることを覚えたいと思います。そして、主の前にいつもへりくだることを学びたいと思うのです。

12節「この出来事を見た総督は、主の教えに驚嘆して信仰に入った」。総督は、パウロの宣告により、バルイエスの目が見えなくなるのを見て、信仰に入ります。でも、それはただその出来事に驚いたからではなく、主の教えに驚嘆したからというのです。ですから、ここには出てきませんが、すでに主のみことばは、バルナバとパウロによって語られていた。そこにバルイエスの邪魔が入り、聖霊に満たされたパウロは、彼の目を閉ざすわけですが、総督は、そこで現された神の力、つまり、魔術ではない、まことの神の力としての主の教えを経験的に知った時に信仰に入ったのです。聖霊が、バルナバとパウロをキプロスに遣わされた理由、それは間違いなく、このセルギオの救いのためであったといえるでしょう。

では、バルイエスはどうなったのか？この続きの13節では、パウロたちがパaposから船出した、となっていますので、彼がどうなったのかはわかりません。でも、パウロが彼に対して語ったことばを、もう一度見ます。**11節**「『…見よ。主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる』と言った」。パウロは、ここで「この先ずっと」ではなく、「しばらくの間」と言っています。なぜそうなのでしょう？むしろ、この先ずっとバルイエスの目が見えない方が、信仰に入った総督にとっても、町の人々にとっても良かったのではないですか？彼は神に敵対する者なのですから。

では、このバルイエスと、回心前のパウロとでは、どちらが罪深いといえますか？バルイエスは総督を信仰から遠ざけましたが、パウロは、クリスチャンたちを激しく迫害しました。教会を滅ぼそうとしたのです。でも、そんな彼が、この時、セルギオに神のことばを語り、バルイエスにはさばきを宣告しました。彼がそうできたのはなぜですか？主イエスが、彼にあわれみを示して下さったからです。主は彼の目を一度閉ざされましたが、その後、再び見えるようにされることで、彼の目だけでなく、心の目も開かれました。それを通してパウロは、あわれみと恵みに満ちた主イエスを信じ、人々にも主を宣べ伝える者となったのです。

そうすると、パウロがここで「この先ずっと」ではなく、「しばらくの間」といったのは、バルイエスに悔い改めて主に立ち返るチャンスを与えるためであった、といっても良いのではないのでしょうか？あの大迫害者であったパウロのために十字架で死なれた主イエスは、このバルイエスのためにも死なれたのです。ここにいる私のためにも、あなたのためにも、主は苦しみを受け、死んで下さいました。主が、私たちの罪を負い、神様のさばきを代わりに受けて下さることで、私たちからさばきを取り除かれ、赦しを与えられるためです。

主は、三日目によみがえられましたが、それは彼を救い主と信じる私たちが永遠のいのちを受け、また聖霊を受けて、主に喜ばれる歩みへと進むためです。ですから、私たちは赦されたというところで満足してはいけません。信じる者に賜物として与えられる助け主、聖霊によって満たされ、導かれるところへと進んで行く必要があるのです。聖霊に導かれて歩まなければ、肉の思い、つまり、自己中心な歩みへと向かうだけだからです。主を礼拝するアンテオケ教会に聖霊を通して語られた主は、今日もみことばに聴き、祈りをもってご自分を礼拝する者に聖霊を通して語って下さいます。そして、従おうと信仰の歩みを踏み出す者に、力を与えて、御心としての宣教を行わせて下さるのです。聖霊に導かれて歩もうではありませんか。